亞炭香報

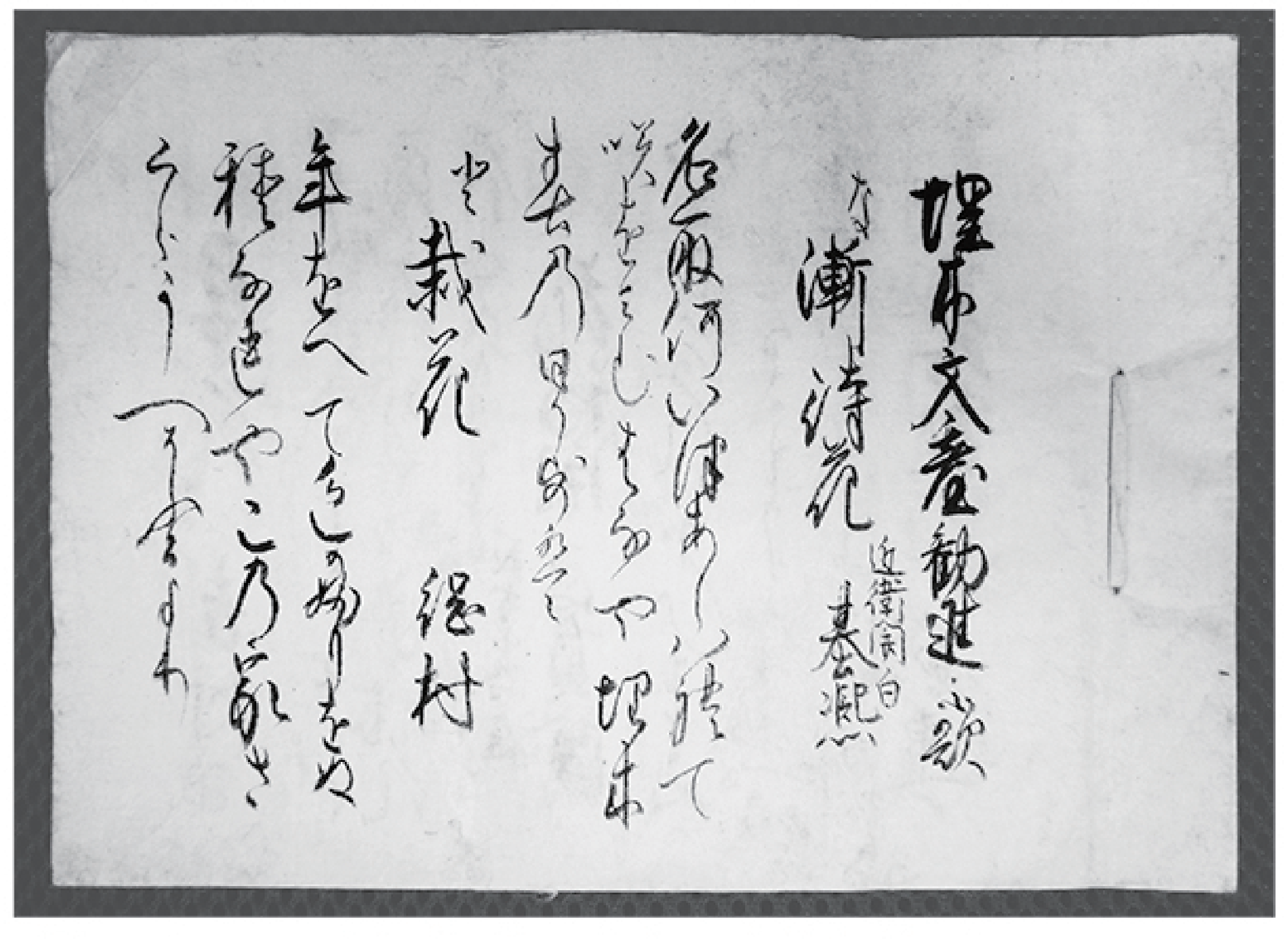
発行所
亜炭広報社
編集人　伊達伸明
第九号
平成二十七年
七月十五日

仙台藩⇄公家衆　心で描く名取川

「埋木文臺勸進之歌」

大條伊達家文書

本紙5号で紹介した、大條伊達家文書「埋木文臺勸進之歌」の解読がこのほどほぼ終了し、全文公開の運びとなった。仙台藩のトップと公家の要人31名が、名取川埋木製の文台（文机）の完成を祝って共作した、希代の歌集の写しである。川埋木の魅力を共有した東西文化人の遊び心が随所にきらめく（2・3面に原文と解意文）。



埋木文臺勸進之歌

な　漸待花　近衛関白　基熈

名取河いつあらハれて咲をミむはなや埋木春乃日数は

と　栽花　綱村

歌集には、順に冒頭の1文字／歌題（すべて花がテーマ）／作者／歌、の順に記されている。最初の歌は近衛関白基熙作、そのあとに綱村公の歌が続く。

「埋木文臺勸進之歌」は、花を題とした31首を集めた歌集である。しかし、それぞれの最初の一字をつなぎ合わせると藤原定家が詠んだ名取川埋木の歌になるという二重構造になっているのが最大の特徴である。この様式は、連歌に代表される一種の言葉遊びによる交流・合作方法で、その歴史は古く、鎌倉時代までさかのぼると言われる。特定の制約の中で特定の題を決めて歌い継ぐというリレー型創作には、時代ごとに多様な展開があり、「勸進歌」もその一つ。

4つ折りにした見開き4ページの紙束4枚分をこよりで綴じた簡易な体裁で、全16ページ。そのうち13枚に歌が書き込まれている。寸法は17・2センチ×12・5センチ。写本とみられるが、今のところ原典の存在は確認されていない。

1ページ目、表題のあとすぐに近衛関白基熈の第1首「な　漸待花　名取河いつあらハれて咲をミむはなや埋木春乃日数は」が始まる。つづいて伊達綱村公の「登（と）」の歌。以下、伊達吉村公、武者小路三位実陰（公卿）、吉田侍従兼連（京都・吉田神社神官）と続き、定家の「名取川春の日数はあらはれて花にぞしつむ瀬々のむもれ木」の歌が完成する。

解読にあたった福島県の保原歴史文化資料館の元学芸員で、あぶくま沈木会の松浦丹次郎さんによると、「完成年などまだ不明な点も多いが、郷土資料として重要な意味を持つ文書。当時の文化の奥深さを広く伝えていく必要がある」と語る。

文台の完成を拠りどころとし、仙台藩と公家衆のトップが共振して紡ぎ出された名取川という心象風景。木を、花を、川を見る眼差しから学ぶべきものは多い。

大條伊達蔵書の銘品

大條伊達家
伊達宗行

江戸中期、綱村公~吉村公の時代の作と思われる古文書が大條家資料の中から出て来た。作者は誰だかわからない。おそらく当時の大條当主大條監物宗道が写した文書と推定される。

これはミニ歌集である。そこには31人の京都と仙台を結ぶ著名人（当時実在の人物）の作になる和歌が並び、筆頭に関白近衛基熈の名取川の埋もれ木の歌があり、以下仙台藩主伊達綱村、次期藩主伊達吉村の歌が続く。その後には、一関藩主田村宗永、仙台藩お抱えの連歌師猪苗代兼寿の他31人の公家たちが並ぶ。そして31首の第一字を順に繋ぐと、それが藤原定家の名取川埋木の歌となっている。つまり定家の歌を本歌にして一字冠字の歌を31人で詠み継いだのである。また各歌には漸待花・栽花・尋花・花初開・見花・独翫花・折花・交花など「花（桜）」をテーマにした名前が付されている。名取川埋木文台の完成を記念して企画されたことはいうまでもない。実に味のある構成となっており、その技量と遊び心に舌を巻く。江戸中期の仙台文化の一端を見る思いである。

支店
針久旅館
停車場前降ル右側
電話二百六番

炭芦塵語

埋木三種混合？　名取川が持つ底なしの潜在能力

古来珍重された名取川産の埋木。江戸後期の出版物「大日本物産図絵・松島景並埋木細工之図」には「名取川より産す。久敷く水中に沈みし木にて純黒或は白斑あり。その質は烏木の如く、多く硯筥、枝折、菓子皿その他いろいろの細工をなす」とある。黒色で、薄いしおりが作れるということは、木質の残る川埋木と思われる。

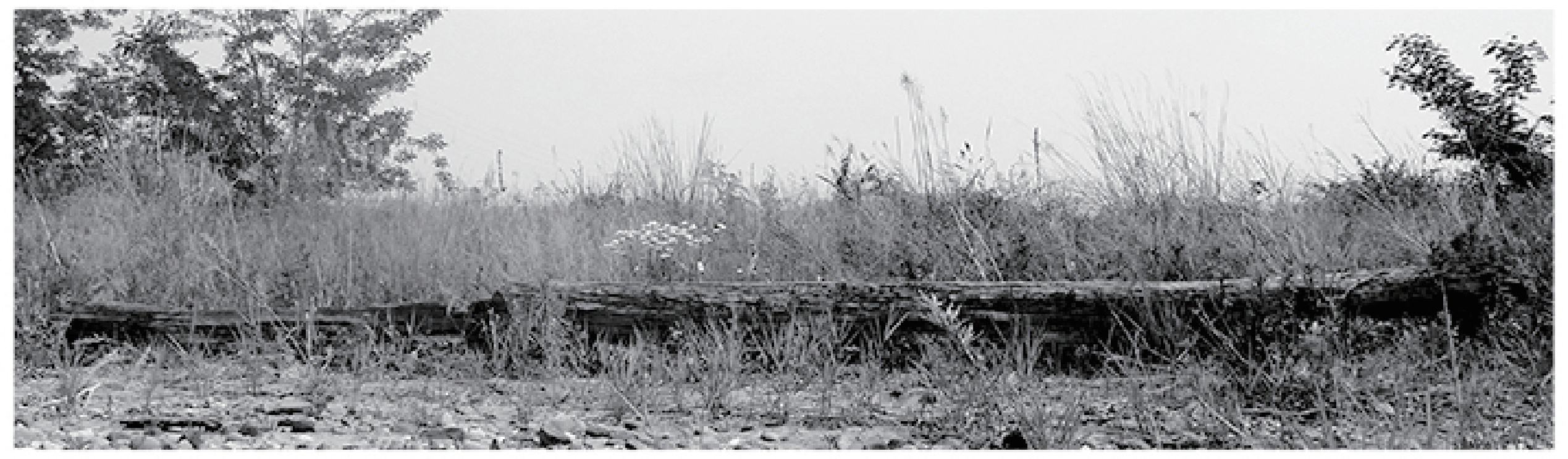
しかし同時期に出版された「眈奇漫録」には、やはり名取川の埋木から作ったという白っぽい硯が紹介されている。しかし水がしみ込む川埋木はどう考えても硯には不向き。とするとこちらは珪化木か。

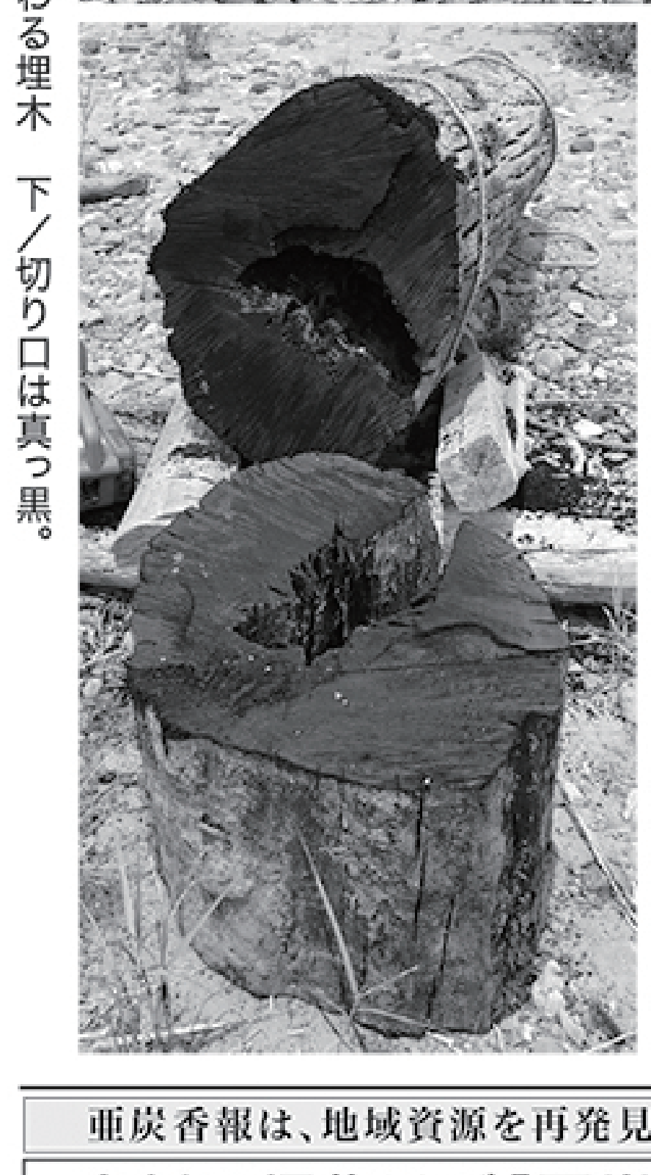
だが、実は熊野堂周辺の河川敷には立派な亜炭露頭もあって、山埋木も採れてしまうからややこしい。

当時は全部ひっくるめて埋木と呼んでいた可能性もあり、骨董店などで「名取川埋木」と聞いても川埋木と即断するのは注意を要する。有名ブランドに偽物が多いのは世の常だが、こちらはなんでも採れてしまう潜在能力の高さゆえの混乱。なやましくもフトコロ深き名取川、ナリ。

現代の名取川埋木、出た！

「スーパーブランド材」、奇跡の発見





右／名取川の河川敷に横たわる埋木　下／切り口は真っ黒。

今年6月、名取川下流の河川敷で埋木が見つかった。本紙でもたびたび「すでに枯渇した幻の材」と紹介してきた名取川埋木だけに、伝説が再び動き出したと言っても過言ではない朗報である。

発見したのは前述の松浦丹次郎さん。阿武隈川を中心に長年埋木の研究を続けており、範囲を拡げて調査している中での快挙だった。

材の直径は約50センチ、全長は約8メートルに達する大物で、樹種はクリ。千五百年から二千年ほど前のものと推測される。打ち上げられて長時間経過したためか全体に割れが多く、芯部分の劣化も進んでいたが、切ってみると切り口は見事に真っ黒。湿り色であることを差し引いても美材である。しかしその水分のせいでずっしり重く、持ち上げるのも一苦労。長さ2メートルほどに小分けしたあと、縄をかけて数人がかりで運び出した。現在は数センチの厚みの板状に粗切りして乾燥中。

かつて名取川産の埋木といえば、燃やしてできた灰が、茶道などの世界では香炉灰として珍重された。火持ちがよいとされ、一説には金と同様の価値で扱われたともいう。

松浦さんが以前、阿武隈川の埋木で燃焼実験を行なってみたところ、木灰に混じってなんと鉄くずが採れた。木に染み込んで木肌を黒変させた水の鉄分がその正体らしい。悠久の時の流れをその身に含む川埋木は、見た目は地味でも超越的。

亜炭香報は、地域資源を再発見するアートイベント「亜炭香古学 2015」《企画制作／伊達伸明，（公財）仙台市市民文化事業団（事業課 022-301-7405）》の活動の一環として発行されています。

本紙の編集及び「亜炭香古学」開催にあたって下記文献を参考にしました。引用資料として書籍広告風に掲載し、謝意と敬意を表します。

東北大学理科報告（地質学）特別号　所収

Science Reports, Tohoku University,
Sendai, Japan, 2nd Ser. (Geol.), Spec.
Vol., No.4, pp. 448-460, 7 text-figs., 1960

仙台平野下に分布している
第四系の地質と
植物遺体について

奥津春生

1. まえがき
2. 仙台平野下の第四系層序
3. 植物遺体について
4. 沖積平野の堆積環境
5. 平野下の地質構造

写真帖

追憶の仙台

消える街、変わる暮らし

写真・小野 幹
文　・日下 信

大きく街が変貌する「瞬間の時代」を克明にレンズがとらえた。暮らしのなかに歴史がいきづいていた昭和30年代の、戦前と戦後がまじりあった風景と人を活写する。

A5判110頁　1800円＋税

無明舎出版
〒010-0041　秋田市広面字川崎 112-1
TEL：018-832-5680　FAX: 018-832-5137

片平の歴史と風景を伝える

仙台市青葉区
片平地区平成風土記
2007～2009

平成21年3月発行
A4判176ページ
定価 1000円

片平地区連合町内会 風土記作成委員会
連絡先：仙台市青葉区大手町6−7（今野方）

宝文堂の本

廣瀬川の歴史と傳説

三原良吉

昭和54年10月20日発行

■定価 680円

発行者：鈴木武夫
印刷所：笹氣出版印刷株式会社
発行所：宝文堂出版販売株式会社
〒983 仙台市卸町2−6−15
発売所：株式会社宝文堂
〒980 仙台市中央区2−4−6
電話：（022）4181（代表）

山形応用地質

第19号

平成11年3月31日発行

発行者　山形応用地質研究会
〒990-8560
山形市小白川町1丁目4-12
山形大学理学部地球環境学科内
電話　023-628-4776

印刷所　中央印刷株式会社
〒990-0051 山形市銅町1-1-5

※連絡先等の引用は奥付のまま

現代埋木

埋木は遠い過去の素材ではない。入手が難しく縁遠いのは確かだが、魅力を今に伝える楽しみ方もある。花開いた埋木加工のアイデアを「現代埋木」と題して紹介する。

埋木楽器「ウモレレ」誕生

東北希少工芸材の結晶

仙台埋木細工の原料である地質時代の炭化樹木「山埋木」と、千~数千年もの間水没したのち地上に現れた「川埋木」。この2つが奇跡の出会いを果たし、1本の弦楽器となった。

名前は「ウモレレ」。制作は亜炭香古学の企画構成を担当する伊達伸明さん。

2012年に始まった亜炭香古学の調査やイベント準備等を通じて知り合った橘川埋木店とあぶくま沈木会から、それぞれ山埋木と川埋木の提供を受け、制作が実現した。

伊達さんは、15年ほど前から取り壊される建物の部材を用いたウクレレ作りを続けており、楽器専用以外の材料を扱うことは珍しくないが、埋木ほど特殊な木材は初めて。しかも、皿や置物はあっても楽器に加工された前例がないだけに、「すべてが手さぐり。今まではケタ違いに予想外のハプニングがたくさん起こりました」と語る。

人類史をはるかに超える稀代の楽器はおよそ10ヶ月ののち、今年7月に産声をあげた。8月の展覧会で展示・演奏される予定。

川埋木は阿武隈産

ウモレレの大半（ボディ＝反響胴の裏板以外）は、昨年6月に阿武隈川から引き上げられた川埋木である。樹種はナラで、あぶくま沈木会の松浦氏も「今まででトップクラスの美麗材」と太鼓判を押す見事な墨色。引き上げてしばらくは、文献にも良材の証と伝わる紫色を呈していた。

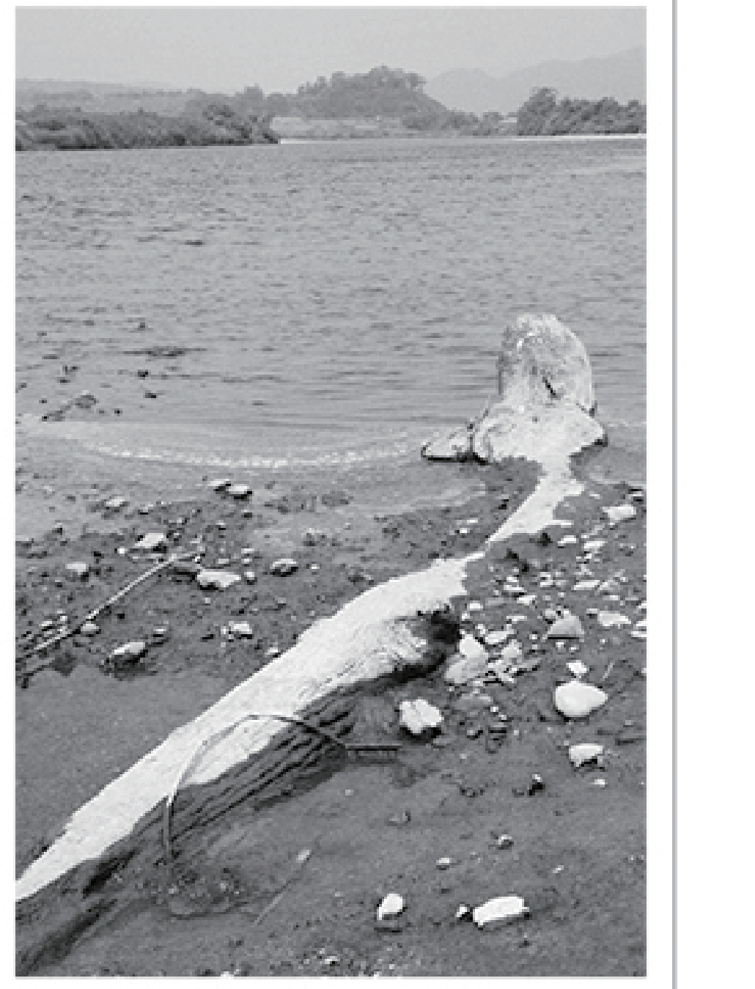
これを早めに薄く粗切りして乾燥を促進させ、ねじれとクセを出しきったのち徐々に薄く成材、最終的に2ミリ以下にしてしばらく寝かす。伊達さんは「外観はただの朽木のようでも、ノコギリで切れば真っ黒の粉が出るし、カンナくずは銀色に輝く。普通の木にはない尋常ならざる雰囲気に驚いた」という。

ナラの埋木は、生成条件によって木目や色に幅があるが、それでも黒灰色周辺の地味な色調。そこで伊達さんは、あぶくま沈木会からさらに色の異なる材料を譲り受け、銀灰色のナラ材をネックに、年数の浅いベージュの板を指板、赤、黄土色の小片をボディの周囲やヘッドの象嵌に用いて、色の対比の中に特徴が引き立つよう工夫を施した。

山埋木は橘川埋木店

向山の橘川埋木店に残る埋木の原木は、職人だった重雄さんが商品の原料として生前蓄えていたもの。その中から、裏板の材料を選定した。山埋木は、炭化して木の弾性が失われているため、弦の張力がかかる表板や曲げ加工が必要な側板には使えない。そこでまず、埋木細工の茶托を作るのと同じ手順で裏板を作って拭き漆まで済ませておき、そののち川埋木で作った曲げ輪っぱの中に落としぶたをはめ込む要領でボディを組み立ててある。

伝統的な埋木細工の中には、表面をなめらかに磨かず、あえて木目をはがした際の凹凸を残して仕上げたものがある。漆をかけるとこのゴツゴツした表情が岩山に見えるのだが、ウモレレの裏板にそびえ立つ峰もこの技法で作られた。何百万年前の樹木が、どうはがれるかはおよそ人知の及ばぬところ。加工するにつれ刻々と変化する山容を楽しみながらの作業だったという。



ウモレレはこの木から生まれた

そして、石巻鯨歯

また、弦の上下両端を支える白い部品（サドル・ナット）には、石巻市鮎川特産の鯨歯（マッコウクジラの歯）が使われている。捕鯨が盛んだった時代に加工基地として栄えた鮎川で生まれた「石巻鯨歯工芸」を3代にわたって続ける千々松商店から入手することができた貴重な原材料。

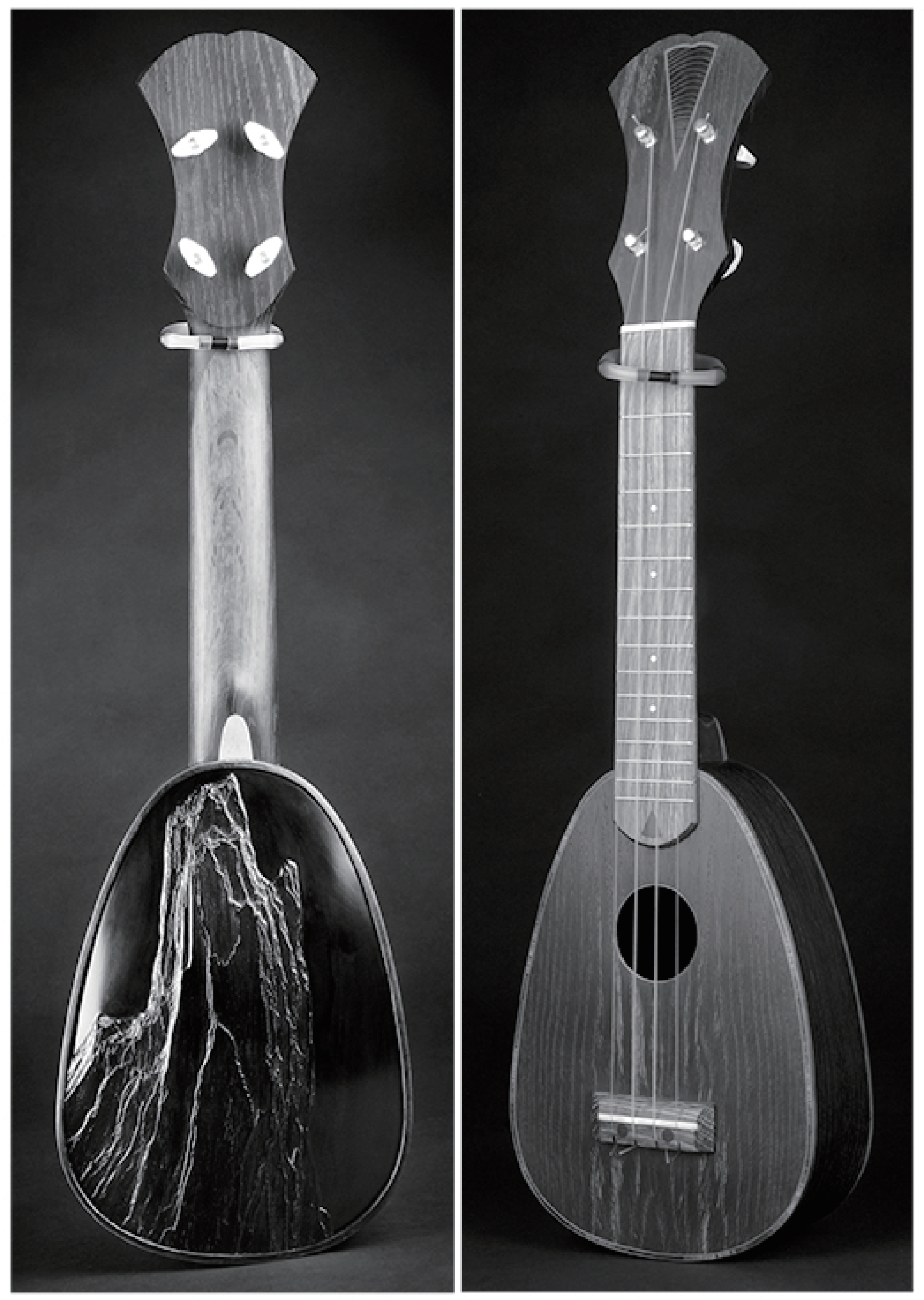
歯は、長さは10~15センチ、直径3~4センチ程度で、バナナのように湾曲し、付け根には円錐状の凹みがある。色は薄いベージュ。

かつて鯨は、食肉以外にもラケットのガットやヒゲ工芸など余すところなく利用され、歯からはブローチやパイプ、麻雀牌などが作られた。しかし捕鯨に対する国際的な規制、食文化やアクセサリーの志向の変化、そして何より津波で店舗や工房が流されたことで店の先行きは厳しい。しかし当代の正行氏は、鮎川浜のおしかのれん街に店舗を構え直し、さらに全国の物産展などに出店して素材の魅力を伝えている。

通常、楽器のこの部品には牛骨を用いるが、印材にもなる鯨歯はさらに硬く、音の伝導もよい。弦の振動を受けた鯨歯が川埋木を震わせ、山埋木が反響する。太古と昭和の記憶が入り混じった東北3大希少工芸材の結晶、その音やいかに。

パイプ・印材・帯止・ブローチ・ネツクレス
鮎川特産品
鯨歯工芸品
千々松商店
2202
観光みやげ

震災前の千々松商店



ウモレレ正面／背面 ： 随所に特徴的な木目が配された（撮影：渡辺博一）

材料一覧

ボディ（反響胴）	表板	阿武隈川から引上げ
	側板	〃
	裏板	山埋木（橘川埋木店）
ヘッド		阿武隈川から引上げ
ネック		あぶくま沈木会提供
指板		〃
ナット サドル		鯨歯（千々松商店）

ウモレレができるまで

（制作メモより）

❶ 成材　（川埋木／ボディ表板・側板）

引き上げた材を数センチの厚みにスライスして乾燥させる。その後亀裂のない部分を選び、手曳きノコで2枚に切り開き、中心で接ぎ合わせる。杢目を線対称にそろえるこの楽器製作の定番技法で胴の表板を作る。

❷ 曲げ木　（川埋木／ボディ側板）

湿らせた材料を熱を加えながら徐々に曲げる。長期間埋もれていた木材だけに、さぞ弾性も失われているだろうと思いきや、予測に反してさほど反動もなく曲がった。かんなかけは硬くて大変だったのに不思議な質感。

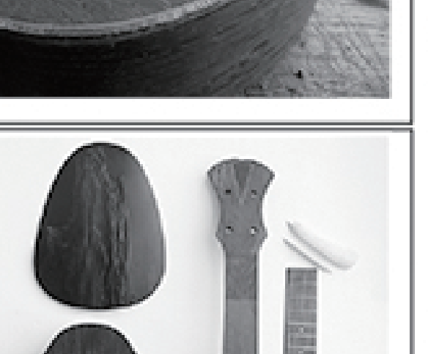
❸ 伝統的「埋木細工」　（山埋木／ボディ裏板）

山埋木は、作業するにつれて潜在的な亀裂やソリが現われ、計画通りに進まない素材。ならばと、はがれそうな層を全部除去したら山の形が現れた。最終形態は素材が導く、山埋木の醍醐味。研磨した後、拭き漆を施す。

❹ 装飾　（川埋木／ボディ周囲）

胴のエッジに象嵌装飾をする。色幅の限られた素材を華やかに見せるためコントラストに工夫する。白から灰色へと変化のあるナラ、ヌルデ、黒ナラを使用。外側には比較的年数の浅い黄土色のケヤキの埋木を巻いた。

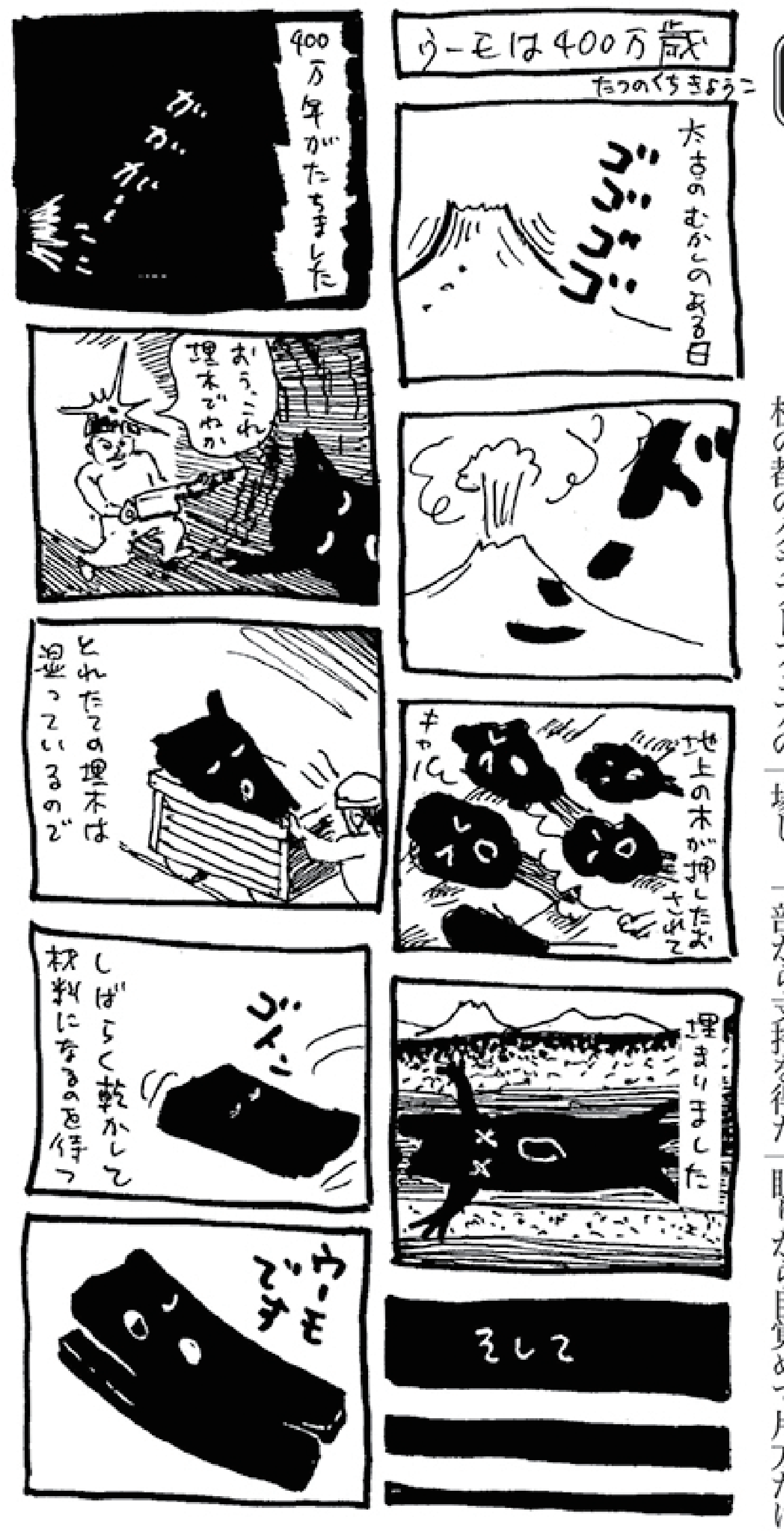
❺ 組み立て



上の部品にネック（竿）、指板（音程を決めるフレットを打ち込んだ板）、ブリッジ（弦を固定する部分）などを全て川埋木で作り、それぞれを組み合わせて完成。

現代埋木

「ウーモ君」お目覚め？


ウーモは400万歳
たつのくちきょうこ
太古のむかしのある日
ゴゴゴゴ
ドン
地上の木が押したおされて
キャー
埋まりました
そして
400万年がたちました
ガガガ
おう、これ埋木でねが
とれたての埋木は湿っているので
しばらく乾かして材料になるのを待つ
ゴイン
ウーモです

2013年にサンモール一番町で開催された仙台・杜の都のクラフトフェアの亜炭香古学イベント「埋木みがき隊」のチラシに初登場し、一部から支持を得た前代未聞の埋木マンガ「ウーモは400万歳」。山埋木の成り立ちを端的に伝えるべく創出されたゆるキャラは、乾燥するにつれて進行するひび割れを片手を上げた姿に見立てたり、長い眠りから目覚めて片方だけ開いた目が独眼竜を思わせるなど、地元色を意識した設定だったが、続編が出なかったこともあって今ひとつ話題にならないままお役御免となった。

しかしメインの「埋木みがき隊」の方は大盛況。年を追うごとに参加者が増え、14年度、15年度とも2日間で500人以上がゴシゴシ磨いて太古のドラマに思いを馳せた。

みがき隊参加者の名作 「埋木姿みがき」

現代埋木

ミニチュア版もあります！

若林区在住の伊藤さんが制作

生まれたばかりのウモレレだが、さっそく超小型のかわいい兄弟分が誕生した。作ったのは若林区在住の伊藤弘さん。自身で家具や内装を仕上げる腕を持ち、亜炭香古学のコアメンバーでもある。山埋木をくり抜いた塊に表板を貼った中空のボディ、1本づつフレットを打ったネックにはナイロン弦まで張ってあって、なんと全長約12センチ！

伊藤さんの力作（ベンチも）